様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2024
課題番号：２１Ｋ０１８７６

研究課題名（和文）個人化社会における公共圏・親密圏の変容とジェンダー―ライフヒストリー分析から―

研究課題名（英文）Transformation of the public and intimate spheres in an individualized society and gender: A life history analysis

研究代表者
杉原　名穂子（SUGIHARA, Nahoko）

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：００２５１６８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：1990年代以降、日本社会は雇用の流動化や家族の変容など、個人化社会といわれる時代に突入した。本研究では16名のライフヒストリー調査からそこにおいて進行している問題状況を描いた。彼らの語りから社会規範が流動化し曖昧になってきていること、平等と多様性言説により異質なものを文化的に包摂するが同時に理解しないまま排除することが同時に進行していること、他者との相違を隠すことにより公共圏が空洞化していること、特にジェンダー問題においてその傾向がみられることなどが描かれた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
インターネットやSNSの発達により、現代社会では多様な情報に接することができる反面、共通の関心をもつものでかたまり、異質な他者との関係構築が難しくなっていること、その結果、社会問題自体も個人化し、不満があっても解決に向かって動くことが困難になってきていること、などの問題が指摘されている。その中で、人々の語りの分析を通し個人化社会における新たな排除の感覚とそのメカニズムを描き出した。そしてその状況で人々がどのように対処し何を求めているかという声を通し、政治的な課題や社会問題を構築する方法について検討を加えた。

研究成果の概要（英文）：Since the 1990s, Japanese society has entered an era of individualization, with employment mobility and family transformation. In this study, we have drawn a picture of the problematic situation that is progressing in Japan through a life history survey of 16 people. Their stories reveal that social norms are becoming fluid and ambiguous, that discourses of equality and diversity are culturally inclusive of different things, but at the same time, they are simultaneously excluding them without understanding them, and that the public sphere is becoming hollowed out by hiding differences with others, a tendency that is particularly evident in gender issues.

研究分野：社会学

キーワード：ジェンダー　個人化社会　ライフヒストリー　公共圏　親密圏

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

1990 年代以降、日本社会は雇用の流動化や家族の変容など、個人化社会といわれる時代に突入したといえる。個人化社会では公共圏と親密圏の変容が従来論じられてきた。U.ベックは選択の自己決定の高まりについて、また Z.バウマンは目標の流動化、自己責任意識の高まり、公共圏の空洞化や異質性の排除の高まりに危機感を示してきた。また、A.ギデンズは個人化社会において再帰性が高度に進行し、人間関係が純粋な関係性に向かっていると述べる。他者との関係性が弱化すると同時にその関係性の構築が重視され、社会関係資本研究も盛んになった。

２．研究の目的

本研究ではこれらの社会情勢をふまえ、バウマンやギデンズが提起した傾向が日本社会で生じているのかを明らかにする。具体的にはジェンダーをはじめとする社会規範が流動化しているのか、それが他者との関係性や共感性に変化を及ぼしているのか、公共圏の空洞化や異質性の排除はおきているのか、それらが世代や性別によって異なっているのか。これらの問題について聞き取り調査を行い、語りの中からそのリアリティを描く。そして個人化社会におけるさまざまな課題に対抗していかに豊かな関係性を構築するか検討する。

３．研究の方法

調査対象者として次の方法で協力者をつのった。2019 年に市民意識についての量的調査を実施した際に、今後計画しているライフヒストリー調査の協力を依頼し、受諾してくださった方の中からランダムに協力依頼を行った。その中から応じてくださった方 16 名（うち新潟市 9 名、東京都区部 7 名）に半構造化インタビュー調査を実施した。対象者の内訳は、年齢では 30 代 3 名、40 代 6 名、50 代 7 名、性別は女性 8 名、男性 8 名である。 学歴は高い傾向にあり、最終学歴大学院 5 名、大学 7 名、短大・高専 2 名、専門学校 1 名、高校 1 名となった。調査は新潟市が 2023 年 9 月から 2024 年 4 月にかけて、東京都区部が 2024 年 10 月から 2025 年 1 月にかけて実施された。

４．研究成果

16 名のライフヒストリー分析から次の知見が導き出された。

(1) 社会規範の流動化の進展

規範の流動性は顕著にみられた。長男規範や家の跡取りについてはそれぞれの家庭の状況によるが、平成生まれの男性であっても当たり前のように言われたものもいる。その状況について「他と比較することがなかったので」当然視していたと情報環境が規範の固定化と関係していたことが昭和や平成初期生まれの人々において語られる。結婚規範の変容、父親規範の変化についても同様で、語りの中で見られる昭和一桁の父親たちは家庭の中で妻や子どもに対して強い力をもっていたことが、特に男性たちの語りの中で、生まれた地域を問わず登場する。

(2) 流動性と新たな排除

現代社会の個人化についてＺ.バウマンは「カテゴリーから個人へ」と特徴づけ社会規範の流動性を強調してリキッド・モダニティとよんだが、本調査ではカテゴリーの流動性が新たな排除の感覚を生み出していることがわかった。その状況は J. ヤング（2007）が過剰包摂社会とよんだ概念がよく適合する。ヤングは第一の近代での排除の在り方は安定したマジョリティと排除されたマイノリティという二項対立の枠組みで論じられてきたが、それは空間的に切り離され分離していることを想起させるものだと述べる。他方、後期近代社会においてはその両者の境界が曖昧になっているのが特徴であり問題であると述べる。社会的カテゴリーの流動性はすなわちカテゴリーの曖昧さであり境界の通過性である。彼はバウマン（2001）を引用しながら、強制的に同一化させ一体化させる食人の戦略と分離し追放する嘔吐の戦略が同時に行われていること、すなわち食い尽くすことと吐き出すことが同時に行われいるのが現代社会だとし、そのような社会を過食症社会（過剰包摂社会）と呼んだ。特に、包摂についてグローバル化の進展やインターネット、SNS などのメディアの発達、教育や政治制度により普遍的な価値観と平等主義的な民主的思想の浸透などをその例としてあげる。こうして自由、平等、能力主義、多様性の思想が普及する一方で、現実には社会的排除が生じていると指摘する。

このような社会状況は、今回の調査でもさまざまな語りの中で得られた。たとえば、「発達障害」や「LGBT」などの新たなラベリングが詳細な知識をともなくことなく拡散し、当事者に新たな生きづらさの感覚を生み出していることまずあげられる。以下、いくつか調査結果からみていくことにする。

Ａさんは 30 代の男性で、子どもの時から「普通にしろ」といわれては怒鳴られたり蹴られたりして育った。普通にしろというのが何のことかわからなかったＡさんは、20 代後半になって自分が発達障害だということを知った。子どものときにはそういう話は全く出てこなかったという。自分が ASD と診断された時には発達障害の「は」の字も知らなかったというＡさんは、こ

こ 10 年ほどで一気に認知が拡大したと感じている。発達障害という名前が知られる前はただの変わり者ですんでいたが、知られるようになってしまったことで「名前がついたことで逆に壁が高くなった」とし、「名前だけが中途半端に知られて、やっぱり怖いから差別意識も出る」現状を問題として訴える。

「(問題への対処が）遅いくせに、啓発だけは中途半端に広がってしまったりするんで。職場でも扱いにくいっていうこともあって差別意識はありますし、やっぱり採る側も不安があるっていうのは、会社の心理としてもあるのはわかるんですよ。そこの能力の活かし方だとか、そういうところをつめる面で、国としても自治体としても取り組みが遅れてるなというのはありますね。その状態で啓発で認知度だけがあがってしまったんで、むしろちょっと生きづらさが増したのかなと。」

Ｂさんは 50 代の男性。父親の放蕩のせいで非常に経済的に苦労した子ども時代を経験し、その中で自分の道を切り開こうと懸命に学び首都圏の難関大学を志した。しかし経済的問題で夜間部に行くことになり、さらに父親が寝たきりになったため、介護のため１年で退学し自分の夢をあきらめることとなった。今から過去のことを振り返ると、日本経済が良いといわれた時代に働いたが「奴隷のように」働き何の恩恵も受けなかったと感じている。彼は「バブル経済」というイメージの拡散が自分のリアリティを反映していないと排除の感覚を述べる。社会問題については性的マイノリティ問題について、文化的包摂がすすみ当事者の現状から離れているという認識を抱いている。

「それこそ、ジェンダー問題についてもそうなんですけど、ものすごく過敏になりすぎているんじゃないかなって。同性愛の知り合いの方がいるんですけども『私たちの本音としては、ほっといてもらいたいんだよね』て言っていたんですよ。」

文化的包摂についいて、差異を顕在化させない風潮がすすんでいることが問題だと述べたのはＣさんである（50 代男性)。特に、子どもたちの貧困問題について、それが顕在化していないことが特に問題だとのべる。

「なかなか誰の目にもわかるような形で顕在化しないっていうのが、逆に言うと、大きな問題なんだろうと思うんですけども。じゃ、貧しい家庭で、子どもが見るからに貧しそうかっていうと、ぱっと見は多分そうではなかったりとか、その裏には、実はなかなか食べるのも大変だったりというようなことがあるようにもよく聞くので。誰しも、みすぼらしくって言ったらあれですけど、そういうふうに見られるのは嫌ですからねえ。」

(3) 個人化社会における関係性と共感性、異質性の排除

バウマン(2000)はリキッド・モダニティでの公共圏の空洞化について次のように述べている。近代社会において公共圏は異質な他者の存在を前提とし、それを許容するものであったが、液状化した近代では公的空間が私的なものにのっとられている。すなわち、共通の不安・関心をもつものが集まり、異質性は排除される。そのため、社会に不満があっても連帯して変革に向かうことはなくもはや「市民」は不在で「個人」だけが存在する。

この議論は異質性の排除のメカニズムの変容を示唆している。第一の近代ではカテゴリーからの排除は見える形で明確に行われる。「普通にする」ことを要求され、そうではないものは、同性愛者、独身者、変な人というまなざしで見られ差別される。同時に、異質な他者を許容しなければならないという規範により、差別問題として取り組まれ、多様性を許容する社会をつくろうとしてきた。後期近代になり、多様性を許容するたてまえのもと、異質なものを取り込みながら同時に排除するという戦略により、より社会問題化し取り組むことが困難な状況になっている。

多くの対象者が触れるのが、自分が好むものだけを周りにあつめ、固まる傾向であり、とくにインターネットやＳＮＳの発達が大きく影響しているという。

たとえばハラスメントの問題である。文化的包摂によりハラスメント問題に以前より格段に気を遣うようになった。細部への気配りが果てしなく求められるようになり、結果、他者への関与が減少し、お互いに関わらないようになっていることが息苦しいと述べられる。

「人と交流しない方がよっぽどいいんじゃないかみたいな感じですよね」（Ｂさん）

「何でもハラスメントって言われちゃうじゃないですか。そんなつもりじゃなくても相手が嫌な気持ちを抱いてしまったらと思うと、言えないみたいな感じで、あんまりプライベートの話は少なくなってると思います。ほんとに当たり障りのない仕事の話とか、ちょっとした自分の家族の話とかをするぐらいで、そんな深く話すとかもないですし。」（Ｄさん 40 代女性）

文化的包摂が進む中で、異質な他者との関係から身をひき、結果的に自分と類似したもので集まる状況について触れながら、そのような現代社会の状況に危惧を示す。彼らの語りはバウマンが述べた公共圏の空洞化の問題と重なっている。

(4) ジェンダー問題について

ジェンダー問題についてはそれぞれ自分の実体験から考えるものが多かった。たとえば、貧困問題やセクシュアリティ、外国人問題などはマスメディアやインターネットでの報道や記事を参考にしながら考える姿勢を示すが、ジェンダー問題は全員が何らかの形で経験する領域でも

あり、むしろ報道とは異なる自分の考えを強調して語る。特に女性においてその傾向が顕著で、Dさんは「自分は特に（差別）をうけた経験がなく、むしろ大事に優遇されてきた」と感じ、女性差別問題に特に取り組む必要を感じていない。Eさん（50 代女性）は女性問題について次のように言う。

「仕事を見つけるという意味では特に女性が困ることはない。むしろ今後、介護とかいろいろな仕事も増えてきてますので、より柔軟な気がするんですね。女性は。なので、最初からそんな高い時給とかを望まなければ、むしろ働きやすいのではないだろうか。」

F（40 代女性）さんは医者の仕事をしながら、ここ 10 年ぐらいで女性差別問題はほぼ感じなくなったという。Hさん（50 代女性）は結婚して姓を変えることに非常に違和感があり通称使用で通してきたが、管理職や政治家に女性が多くないことについては関心がないという。

「女性の管理職の増える・増えないは、私の中ではどっちでもよくて、多分それを望んでいれば上がっていくだろうし。男性の方がむしろ、すみません、女性よりも男性の方が「女性ならではの」て言ったりしてくれる人が多かったりするので、ちゃんと能力を認めて「このひとは」ていう感じで見てくれてる会社の管理職の人たちもいらっしゃるので、そこはもうほんとに能力と人柄と公平に判断してみていただければ、女性が、とか男性が、て言わなくてもいいかな、って思ったり。」

今回の調査対象者を選ぶ元になった量的調査において、女性の政治家や管理職が少ない現象については特に問題視しない人が男女とも増えていたが、女性自身においても自分のリアリティから離れた問題には共感を示さず問題ともしないという姿勢が見られる。個人化がすすみ、自己選択と自己責任の社会への変容がカテゴリーにもとづいた社会問題の構築を阻害していることがわかる。

(5) 共感性の構築

今回のライフヒストリー分析では、文化的包摂がすすむ中でうまれている排除の形がささざまに描き出された。言葉の認知度だけが上昇し新たなラベリングがおきていること、異質性を隠すことで社会問題化しづらくなっていること、他者との深いかかわりあいを避けること、その結果、異質な他者と向き合うことを遠ざけていること、自己のリアリティを越えた社会問題には共感を示しづらくなっていること、ジェンダー問題では特にその傾向が見られること、個人化社会は社会問題への連帯した取り組みみが難しく、従来の社会学研究で指摘されている通り、公共圏の空洞化が見られることなどが明らかになった。その点で、バウマンが危惧した点は日本社会でもあてはまるが、それではその問題にどのように対処したらよいのか。今回の聞き取り調査で当事者の語りからその方法をさぐると、たとえば政治的なリーダーシップ、政治による制度の改革、またメディアを通した間接的な知識ではなく、対面によるリアルな体験を通す機会をもうけること、などが示唆的に得られた。他者との違いを隠すことで社会問題化を阻害する点はバウマンやヤングの議論には出てこなかったため、日本社会の特徴なのか今後検討することも求められる。

＜引用文献＞

Bauman,Z.， 2000， *Liquid Modernity,* Polity Press,（森田典正訳『リキッド・モダニティ―― ，2001，*The Individualized Society,* Polity Press,（澤井敦・菅野博史・鈴木智之訳『個人化社会』、青弓社、2008 年）．液状化する社会』大月書店、2001 年）．

Young,J.， 2007，*The Vertigo of Late Modernity*, Sage.（木下ちがや・中村好孝・丸山真央訳『後期近代の眩暈―排除から過剰包摂へ』、青土社、2008 年）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 中西祐子	４．巻 832
２．論文標題 日本における教育とジェンダーギャップ	５．発行年 2023年
３．雑誌名 We Learn（月刊・ウ ィラーン）	６．最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村尾祐美子	４．巻 61(2)
２．論文標題 未成年期に父母が離婚した人は面会交流と重要事項決定についてどう考えているのか：父母の不和理由『暴力や虐待』群と『それ以外』群の比較	５．発行年 2024年
３．雑誌名 東洋大学社会学部紀要	６．最初と最後の頁 33-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川由香里	４．巻 61
２．論文標題 結婚・交際に対する社会関係資本の影響	５．発行年 2024年
３．雑誌名 立正大学人文科学研究所年報	６．最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川由香里	４．巻 108
２．論文標題 青少年のジェンダー観とセクシュアリティの変容	５．発行年 2023年
３．雑誌名 社会学研究	６．最初と最後の頁 27-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 天童睦子　石川由香里	4．巻 57
2．論文標題 地方ミッション系女子大学卒業生の社会関係資本と幸福感－宮城学院卒業生のジェンダー意識・友人関係に着目して	5．発行年 2024年
3．雑誌名 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所『研究年報』	6．最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 千田有紀	4．巻 31
2．論文標題 第1回法制審議会家族法制部会におけるドメスティック・バイオレンス(DV)にかかわる議論	5．発行年 2022年
3．雑誌名 武蔵大学総合研究機構紀要	6．最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村尾祐美子	4．巻 763
2．論文標題 公務員の採用選考と性別情報 ： 差別と闘うツールとしてのジェンダー統計	5．発行年 2022年
3．雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	6．最初と最後の頁 33-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 喜多加実代	4．巻 61
2．論文標題 より多くの女性に届く仕事と家庭の両立支援のために	5．発行年 2023年
3．雑誌名 JP総研リサーチ	6．最初と最後の頁 34-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川由香里	4．巻 39
2．論文標題 子どもを通じての母親の社会関係資本の形成	5．発行年 2023年
3．雑誌名 立正大学文学部研究紀要	6．最初と最後の頁 121-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 千田有紀	4．巻 72(4)
2．論文標題 フェミニズム、ジェンダー論における差異の政治―平等から多様性へ	5．発行年 2022年
3．雑誌名 社会学評論	6．最初と最後の頁 21-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 千田有紀	4．巻 27
2．論文標題 離婚の際の家庭裁判所での調停利用者の経験―離婚後の子どもの養育に関する調査の自由記述欄の分析	5．発行年 2024年
3．雑誌名 ソシオロジスト	6．最初と最後の頁 21-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉原名穂子	4．巻 155
2．論文標題 過剰包摂社会における包摂／排除―ライフヒストリー調査から	5．発行年 2024年
3．雑誌名 新潟大学人文科学研究	6．最初と最後の頁 51-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 喜多加実代	4．巻 74
2．論文標題 選択的夫婦別姓に関する社会意識：他者のニーズの顧慮と平等の志向	5．発行年 2025年
3．雑誌名 福岡教育大学紀要、第二分冊、社会科編	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 中西　裕子
2．発表標題 コロナ禍で大学での学修はどのように変容したか
3．学会等名 日本社会学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 村尾　祐美子
2．発表標題 仕事の世界のジェンダー統計：情報収集・集計・公表をめぐって
3．学会等名 国際ジェンダー学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 石川由香里
2．発表標題 地方女子ミッション教育と社会関係資本―卒業生調査の分析から―
3．学会等名 日本教育社会学会
4．発表年 2023年

〔図書〕　計6件

1．著者名 友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留 編	4．発行年 2023年
2．出版社 有斐閣	5．総ページ数 323
3．書名 社会学の力（改訂版）	

1．著者名 林雄亮・石川由香里・加藤秀一	4．発行年 2022年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 250
3．書名 若者の性の現在地	

1．著者名 永瀬伸子・江原由美子・中西祐子ほか22名	4．発行年 2022年
2．出版社 日本学術協力財団	5．総ページ数 322
3．書名 人文社会科学とジェンダー	

1．著者名 千田有紀・菊地英明	4．発行年 2022年
2．出版社 北樹出版	5．総ページ数 126
3．書名 グローバリゼーションと変わりゆく社会	

１．著者名 筒井淳也、相澤真一、吉川徹、三輪哲、藤原翔、福井康貴、新谷周平、川口俊明、中澤渉、堀有喜衣、中西祐子、貴戸理恵、香川めい	４．発行年 2024年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 264
３．書名 岩波講座社会学第11巻：階層・教育	

１．著者名 Andrea Germer; Ulrike Wohr; Nakanishi Yuko; and 32 others.	４．発行年 2025年
２．出版社 極東書店	５．総ページ数 363
３．書名 Handbook of Feminisms in Japan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	村尾　祐美子 (MURAO Yumiko) (20408959)	東洋大学・社会学部・准教授 (32663)	
研究分担者	喜多　加実代 (KITA Kamiyo) (30272743)	福岡教育大学・教育学部・教授 (17101)	
研究分担者	千田　有紀 (SENDA Yuki) (70323730)	武蔵大学・社会学部・教授 (32677)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石川　由香里 (ISHIKAWA Yukari) (80280270)	立正大学・文学部・教授 (32687)	
研究分担者	中西　祐子 (NAKANISHI Yuko) (90282904)	武蔵大学・社会学部・教授 (32677)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関